



Title	沖縄県立養護学校の生活単元学習の検討(3) : 養護学校別の生活単元の特徴
Author(s)	中村, 哲雄
Citation	琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 = The bulletin of the Research and Clinical Center for Handicapped Children(4): 19-27
Issue Date	2002-05-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/5082">http://hdl.handle.net/20.500.12000/5082</a>
Rights	

## 沖縄県立養護学校の生活単元学習の検討(3)

### — 養護学校別の生活単元の特徴 —

中村 哲雄

Examination of prevailing Life-Unit Learning in Schools for Students  
With the Intellectually and Physically Disabled in Okinawa (3):  
The Characteristics of Life-Unit Used in  
Some Individual Schools.

Tetsuo NAKAMURA\*

#### Summary

This paper aims to analyse the individual characteristics on prevailing life-unit learning in schools for the physically and mentally handicapped in Okinawa. Results are as follows: (1) There are great differences about time allotment of life-unit learning. Especially a bundle of grades as lower, middle and higher is made, and allocated time accordingly to each. Being allocating time, children's development, grade, and cumulative experiences seem to be very important but not carefully considered. (2) The order of life-unit composition of the schools is the seasonal, school event, and problem, and same in the time allotment. The each ranges of time allotment in three composition are 37~59% in the seasonal, 23~31% in school event, and 8~26% in problem. As with time allocation the range of school events is mostly short because, author suppose, they would be administered uniformly in all schools at the same time. (3) Concerning the characteristics of each month through the year on life-unit learning, there are no specific ones observed.

Key words: life-unit learning, physically and mentally handicapped, time allotment, cumulative experiences, life-unit composition

#### 1 はじめに

本論文はこれまでに発表してきた「沖縄県立養護学校の生活単元学習の検討」の(1)及び(2)の続編である。これまでに発表した2編の論文では、沖縄県立養護学校の生活単元の実態が以下のように明らかにされた。

先ず論文(1)では

(1) 単元の数に養護学校間に大きな差がある。

- (2) その格差は知的養護学校間にも同様にあった。  
(3) 肢体不自由養護学校間でもそれは同様であった。  
(4) 児童の障害の実態と生活単元の数とは関係ない。  
(5) 9つの養護学校の平均生活単元数は67であった。  
(6) 知的養護学校の平均生活単元数は75で、肢体不自由養護学校のそれは57であった。  
(7) これより知的障害養護学校の方が肢体不自由養護学校よりも生活単元の数が多いといえる。

\*Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

(8) 学校の規模と生活単元の数には関係が見られない。

次に論文(2)では

- (1) 生活単元リストの特徴として、季節及び行事単元の学年の重複が目立った。その結果、6年間も同じ単元名で指導されると、児童の側のみならず、教師側にもマンネリ化が見られるということが指摘された。
- (2) 生活単元の全体的特徴としては、行事単元が最も多く、次いで季節単元、課題単元の順に減少しているが、特に課題単元数が極端に減少している点が挙げられた。この点、児童の発達に重度・重複化しているのか、教師の検討不足なのかについての疑問が呈示された。
- (3) 生活単元数の学年別の比較では、学年進行による発達差異への考慮はなく、逆に学年間の不均衡が目立った。特に第2学年の単元数が極端に少なくなっている。その根拠は不明ではあるが、教師のバランス感覚の欠如によるものではないかという指摘がなされた。
- (4) 生活単元の構成要素については、季節と行事単元がほぼバランスが取れているのに対して、課題単元は極端に少なくバランスが悪い。学年間の比較では多少課題単元に問題があるが、ほぼ均衡が採れている。
- (5) 生活単元の構成別の検討では、第4学年に山があるが、ほぼ学年間のバランスがとれていた。
- (6) 行事単元の構成別では、やはり第4学年が最も多く、第2学年が最も少ない選択となっているが、3学年、5学年、6学年はほぼバランスが採れているのが特徴となっている。
- (7) 課題単元の構成別では、学年間のバランスは全体がとれてなく、1学年が2学年や3学年より多くなっているのが特徴的である。これは教師の専門的な配慮不足によるものではないかということが指摘された。以上のことを踏まえて、今回の論文(3)では、4つの養護学校の生活単元の個別的な特徴について明らかにすることを目的とした。

## 2 学校別の生活単元学習の時間配当

県内の7つの養護学校の生活単元に関する授業時間の配当を検討したのが、表1の通りであった。

この表によると次のことが明らかである。

まず第一の特徴は、学校によって学年の生活単元学習の時間配当が大きく異なっているということである。特に目立つのは、低学年に生活単元学習の指導を導入していない学校もあり、その点、他学校とは大きく異なっている。その理由は不明であるが、推定するならば、恐らく学校全体として子供の実態が重いので、低学年では容易に生活単元学習が展開できないので、敢えてカットしたということではないだろうか。

第二の特徴は、生活単元学習の時間配当は、1学年と2学年、3学年と4学年、5学年と6学年というふうに、3区分している学校と、低学年と高学年に大きく2区分している学校があるという点である。

第三の特徴は、大抵は低学年の時間配当が少なく、高学年になるに従って、増えていくという傾向があるが、中には中学年が最も多く、次いで高学年、低学年となっている学校もあり、常識的に低学年より高学年に時間数が多くなるだろうと、即断することができないという点である。

第四の特徴は、区分が低・中・高、或いは低・高になっている場合でも、生活単元学習の時間は、数字的に見て、機械的な配当・配分となっているということである。例えばA校では高学年は245時間、BとF校は350時間、C校は280時間、D校は210時間、E校は385時間、Gは245時間、となっている。このことから養護学校の生活単元学習の配当時間数は、学年や児童の発達とは関係なく、設定されているような印象を受ける。なぜそのよ

表1 生活単元学習の授業時間の配当

(単位：時間)

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
①	A	170	175	210	245	245	245
②	B	136	140	210	350	350	350
③	C	105	105	105	280	280	280
④	D	175	175	280	280	210	210
⑤	E	0	0	0	385	385	385
⑥	F	245	280	350	350	350	350
⑦	G	204	210	210	245	245	245

うな配当になっているのかに関しては、資料だけでは不明である。当然、これに対しては、現場が教育課程造りでマンネリ化している結果、便宜的または機械的に時間設定をしているのではないかと言いたい。

### 3 学校別の生活単元の構成要素と割合

生活単元学習の単元構成は、季節、行事、課題、その他となっていることは、これまでの論文の(1)(2)で詳述した。ここでは県内の養護学校の生活単元の構成を検討した。その結果は図1に示す通りであった。この図によるとその特徴は以下の通りである。

まず全体的な特徴は、どの学校も季節、行事、課題の順に生活単元の構成となっているという点にある。それらの割合は学校によって大きく異なっている。

因みに割合の幅は季節で37%から59%となっていて、その差は22%。行事では23%から31%で、その差は8%。課題では8%から26%で、その差は18%である。このことから学校別の生活単元の構成では、季節が最も多く、次いで課題、行事ということになる。行事の時間配当の差が小さいのは、県内の養護学校が統一的に年間行事を行っているの、それが学習時間に反映されているのではないだろうか。

(単位：%)

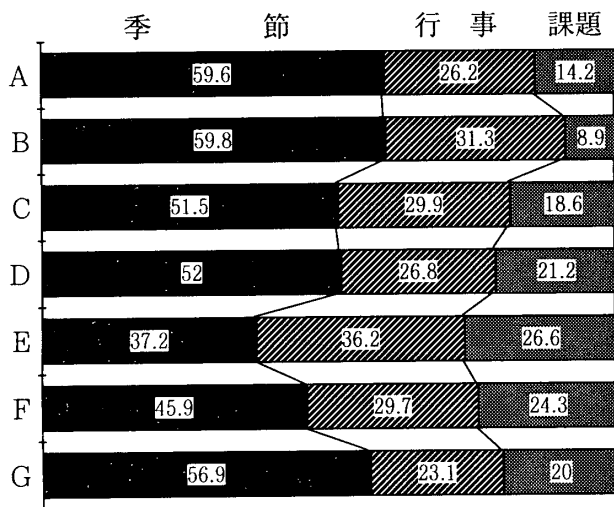


図1 生活単元学習の類型別割合

### 4 生活単元の月別割合

養護学校の7校の4月から1月までの年間を通した生活単元学習の実態はどうなっているのだろうか。その分析したのが図2である。この図によると、生活単元の構成別の特徴は以下の通りである。

特徴の第一は、全体として単元の構成要素のバランスが採れているのが1月から3月までの3学期で、他の1学期と2学期は、構成要素間のバランスが採れていない。特にその傾向が2学期に顕著となっている。例えば11月の単元構成要素別では、課題が多くなっていて、次いで行事、季節となっている。特に季節単元が最も少なく、13%となっているのが特徴的である。なぜそのように他の月と逆転しているかに関しては、不明である。なにか11月には、季節的又は行事的に課題的な単元を指導する必要があるのだろうか。

(単位：%)

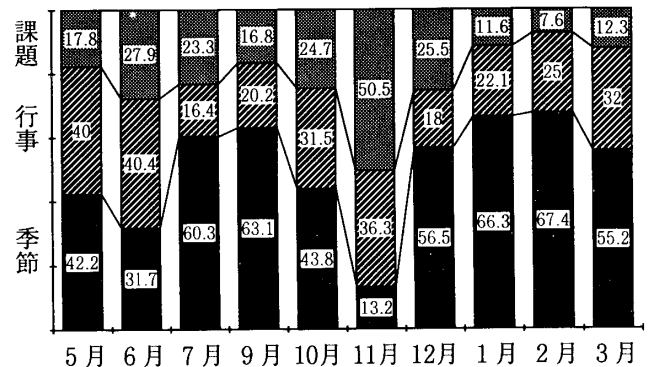


図2 生活単元学習の内容別月別割合

### 5. 4校の学校別の生活単元の特徴

#### A校について

#### 1) 学年別の生活単元の配当とその特徴

A校の生活単元の学年別配当の実態は、図3に示すとおりであった。この図によると、この学校の生活単元配当の特徴は、中学年の3学年と4学年にピークがあり、それから低学年、高学年という形となっている点にある。中でも特に5年生のそれが最も少ないのが目立つ。生活単元は、養護学校の他の指導形態、日常生活の指導及び遊びの指導と較べて、その指導が難しいとされているので、学年の進行に従って生活単元が増加して行く

のが通常と思われる。しかし、この学校の生活単元の配当は、それに逆行しているのので、これが特徴であり問題・課題であると言えようか。

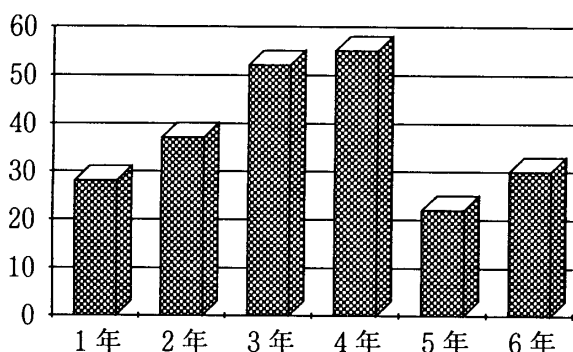


図3 A校の学年別生活単元数

## 2) 学年別の生活単元の構成とその特徴

A校の学年別の生活単元の構成要素については、「季節」、「行事」、「課題」、「その他」で分析した結果、表2と図4に示すとおりであった。この表と図から次のことが明らかである。

「季節」単位に関しては、その特徴としてピークが4年生にあり、次いで1年生となっている点と、全体としては低学年（1～3年）よりは高学年（4～6年）にやや多く配当されている点が指摘できる。

なお何故ピークが4年と1年になっているのかについては、理由不明であるが、それが特徴であり課題であるとも言えよう。

「行事」単位に関しては、ピークが6学年、2学年、5学年の3つの学年にあり、それ以外の学年は、ほぼ同程度の割合となっているのが特徴的

表2 A校の学年別の生活単元の構成と割合

(%)

学年	季節	行事	課題	その他
1年	29	29	21	21
2年	22	52	13	31
3年	23	30	11	36
4年	32	30	21	17
5年	26	52	13	9
6年	23	54	19	4
平均	26	41	16	17

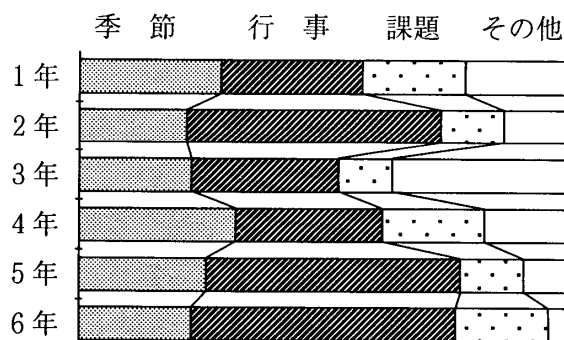


図4 A校の学年別の生活単元の構成と割合

である。これについては、学校の行事は高学年が主体となって実施される場合が多いと思われるので、高学年に単元が多く配置されていると理解することができる。しかし、ここでも課題は、2学年が高学年と同じ配当となっている点である。このことに関する理由は不明である。

「課題」単位に関しては、学年間の差異が余り見られず、ほぼ均衡的と言えよう。但し1年生が5、6年生よりやや高い配当となっている点は問題点として指摘されよう。

## 3) 学期別の生活単元構成の実態とその特徴

A校の学期別の生活単元の配当は、図5に示すとおりであった。この図から次のような特徴が明らかである。

「季節」単位に関しては、1学期より2、3学期になるに従って、その差は僅かではあるが、数が増えている。

「行事」単位に関しては、3学期が最も多く、次いで2学期となっていて、2学期は最も少ない学期となっている。

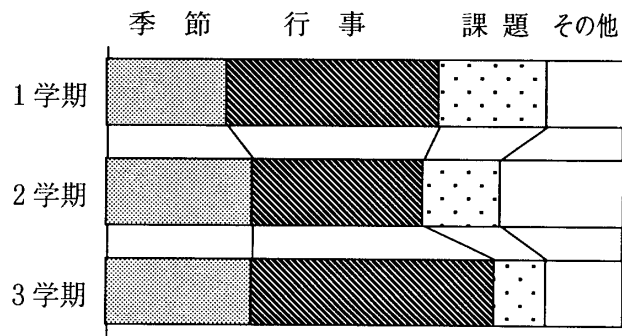


図5 A校の学期別の生活単元の構成と割合

「課題」単元に関しては、1学期が最も多く、次いで2学期、1学期という実態であった。課題は単元学習では最も困難なものなので、また発達や経験の積み重ねを考慮すると、実態とは逆の形がよいのではないかとと思われるが、学校の実状が不明なので明確な判断はできない。

### B校について

#### 1) 学年別の生活単元の配当とその特徴

B校の学年別の生活単元の配当の実態は、図6に示すとおりであった。図よりこの学校の学年別の生活単元の特徴は、4学年に山のピークがあるが、全体としては山あり谷ありのいわゆるW型の配当となっている点にある。どうして奇数学年が偶数学年よりも単元数が多くなっているのかに関しては、理由不明である。

ところで6年が最も少ない配当となっているが、これは「季節」的単元が、学年の進行による発達向上や自然の循環的体験の積み重ねからして、減少させているものと理解することができる。しかし、ここでも2学年より3学年が、4学年より5学年が多くなっている点は課題であり問題であると指摘できよう。

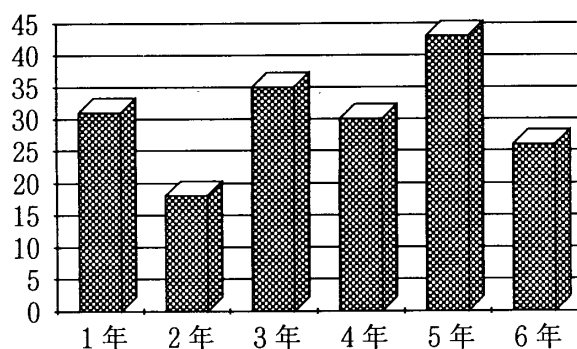


図6 B校の学年別生活単元数

#### 2) 学年別の生活単元の構成とその特徴

B校の生活単元の構成別の実態と特徴は、表3及び図7に示すとおりであった。この表と図によると以下の特徴が見られる。

「季節」単元に関しては、5学年が極端に少なく、その他の学年はほぼ均衡的な配当となっている。なぜ5学年だけが極端にバランスが採れてい

表3 B校の学年別の生活単元

学年	季節	行事	課題	その他
1年	39	19	26	16
2年	42	38	4	16
3年	40	37	9	16
4年	37	47	13	3
5年	5	27	64	4
6年	39	39	13	9
平均	34	35	22	9

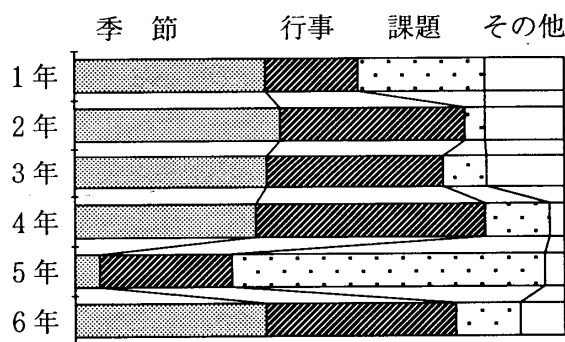


図7 B校の学年別の生活単元の構成と割合

ないのかについては、理由不明である。

「行事」単元に関しては、4年生が最も多く、1年生が最も少なくなっている。その他の学年はほぼバランスが採れているのが特徴的である。

「課題」単元に関しては、「季節」とは逆に5年生が極端に異常と思えるほど多くなっているのが目立つ。次いで1年生が多い。これも何故そのような結果となっているのかに関しては、理由不明である。強いて理由を挙げると、「季節」単元が少ない分、「課題」単元に割り振ったとしか言いようがない。ここが問題であり検討課題であろう。

#### 3) 学期別の生活単元構成の実態とその特徴

学期別の配当の実態は、図8に示したとおりであった。この図から次のような特徴が言える。

「季節」単元に関しては、1学期と3学期がほぼ同じで、2学期が少なくなっている。

「行事」単元に関しては、3つの学期共ほぼ同じで、差もない。

「課題」単位に関しては、2学期が最も多く、次いで1学期、最後に3学期となっている。この学校も発達と経験の積み重ねの点からすると、バランスが悪いと言わざるを得ないだろう。

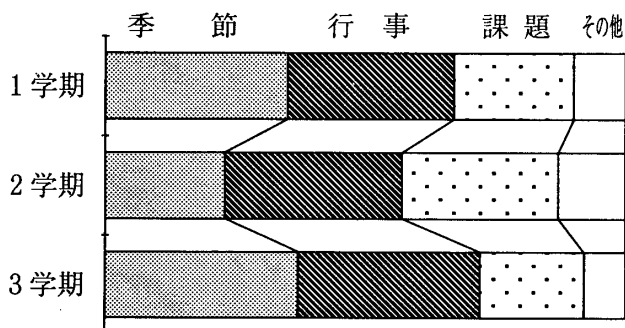


図8 B校の学期別の生活単元の構成と割合

### C校について

#### 1) 学年別の生活単元の配当とその特徴

C校の学年別生活単元の配当の実態は、図9に示すとおりであった。この図によるとC校の生活単元の配当は、極めて特異的なものとなっていると言える。その特徴は以下のようなものである。

第一の特徴は、単元数の最も多いのが5学年で次いで6学年、次いで1学年と4学年、最後は2学年と3学年となっている点にある。この学校でも単元の数と学年の関係は明確に意識されていない。

第二の特徴は、2学年と3学年がほぼ同じで、極めて少ない配当となっているのが目立つという点である。なぜそのように極端なバランスを欠いたものとなっているのかに関しては、理由不明である。その背景理由を敢えて推定するならば、全

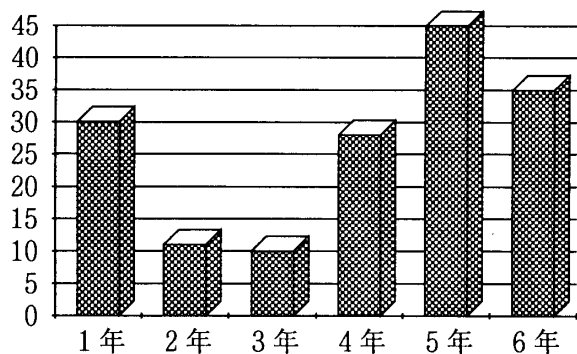


図9 C校の学年別生活単元数

体の検討を十分にしていない結果、バランスを欠いたものとなってしまったということではないだろうか。発達が極端に遅れている学年の場合は別として、通常は全体的なバランスを視点に、生活単元の取捨選択がなさせることが望ましいのではないか。

#### 2) 学年別の生活単元の構成とその特徴

学年別の生活単元の構成要素については、「季節」、「行事」、「課題」、「その他」で分析した結果、表4と図10に示すとおりとなった。この表と図から次の特徴が明らかになった。

「季節」単位に関しては、1学年にそのピークがあり、次いで6学年、5学年、4学年、2学年の順であった。特に3学年には季節単元がないのが目立った。「季節」単位については、学年とその数との間には、関係性が見られないのが特徴的と言えよう。

「行事」単位に関しては、3学年が最も多く、次いで2学年、4学年、5学年、6学年、1学年の順であった。3学年が特に多いのは、先の「季節」単元の配当は無かった分、「行事」単元に割り振ったことによるものと思われる。ここでも学年と「行事」単元との相互関係は見られなかった。なおそのような結果になった根拠は不明であった。

「課題」単位に関しては、ピークが3学年と2学年にあり、次いで4学年、5学年、1学年と6学年となっていた。この「課題」単位についても、これまでと同様、学年と単元の関係性は全く見られないのが実態であった。これまでも述べてきたことだが、「課題」は生活単元の授業展開では最

表4 C校の学年別の生活単元

学年	季節	行事	課題	その他
1年	50	40	6	4
2年	11	56	22	11
3年	0	63	25	12
4年	24	55	14	7
5年	31	49	9	11
6年	39	47	6	8
平均	31	52	14	3

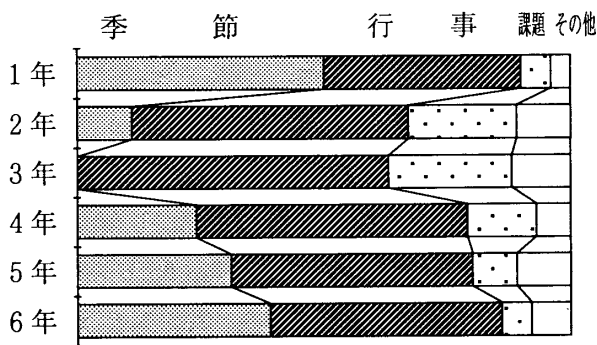


図10 C校の学年別の生活単元の構成と割合

も困難な単元であるので、学年進行と相関するのが常識であらう。それが、ここでは配慮されていないと指摘する必要がある。

### 3) 学期別の生活単元構成の実態とその特徴

C校の学期別の生活単元の配当は、図11に示すとおりであった。この図から次の特徴が明らかとなった。

「季節」単元に関しては、2学期が最も多く、次いで1学期と3学期で、その数は全く同じであった。学期と生活単元とは関係がなかった。

「行事」単元に関しては、1学期が最も多く、次いで3学期、2学期であった。ここでも学期と単元の配当には関係性がなかった。全体的には、「行事」単元が他の単元に比べて多くなっているのが特徴と言えよう。

「課題」単元に関しては、1学期と2学期が全く同じで、次いで3学期となっていた。しかし、3学期の課題は他の2つの学期に比べて、極端に少ないのが目立った。なぜそのような結果になったのかについては、理由不明である。課題単元は

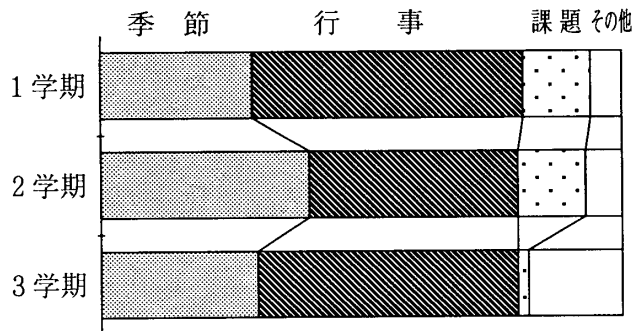


図11 C校の学期別の生活単元の構成と割合

表2 A校の学年別の生活単元の構成と割合 (%)

学年	季節	行事	課題	その他
1年	29	29	21	21
2年	22	52	13	31
3年	23	30	11	36
4年	32	30	21	17
5年	26	52	13	9
6年	23	54	19	4
平均	26	41	16	17

発達と積年の経験が授業展開にとって重要な要素であるだけに、この形は検討を要しよう。

### D校について

#### 1) 学年別の生活単元の配当とその特徴

学年別による生活単元の配当は、図12に示すとおりであった。図よりD校の学年別の生活単元の特徴を検討すると、次のようなことが言えよう。

まず学年別で見ると、上学年の6学年が最も多く、ついで4学年、2学年の順となっている。しかしなぜか偶数学年に単元数が多く、逆に奇数学年が極端に少なくなっているのが目立つ。いわゆるW型の配当である。学年と単元との関係性が全く見られないのが特徴であろう。なぜそのような配当になっているのかに関しては、その根拠を見いだすことができなかった。敢えて言うならば、これも既に述べたことだが、全体的なバランス感覚を欠いた結果としか言いようがないのではないだろう。一種のマンネリ化現象ではないか。教員集団の熱心な教育課程の検討が望まれよう。

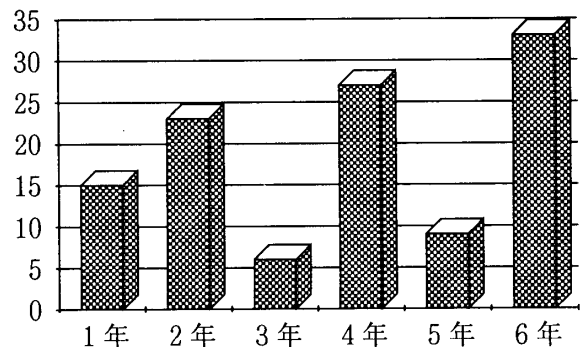


図12 D校の学年別生活単元数



## 2) 学年別の生活単元の構成とその特徴

学年別の生活単元の構成要素の分析結果は、表5と図12に示すとおりであった。この図より「季節」、「行事」、「課題」、「その他」の構成要素を見ると、以下のようなことが明らかである。

「季節」単元に関しては、1学年と2学年に極端なピークがあり、次いで6学年、4学年、3学年となっているが、5学年には配当がなされていない。ここでも学年進行と単元数との関係は見られず、その理由も不明である。

「行事」単元に関しては、5学年が100%の割り振りをしている、次いで3学年、6学年、4学年、2学年、1学年の順となっていた。この問題は、なぜ5学年が100%の配当となっているのかという点である。これに対しては、異常なまでの単元構成の配当となっているとしかいいようがない。なお単元と学年の関係はここでも見られなかった。

「課題」単元に関しては、多いのは5学年、1学年、6学年、2学年となっていて、3学年と5

表5 D校の学年別の生活単元

学年	季節	行事	課題	その他
1年	67	13	20	0
2年	58	38	4	0
3年	14	71	0	15
4年	25	46	25	4
5年	0	100	0	0
6年	33	55	9	3
平均	33	54	9	4

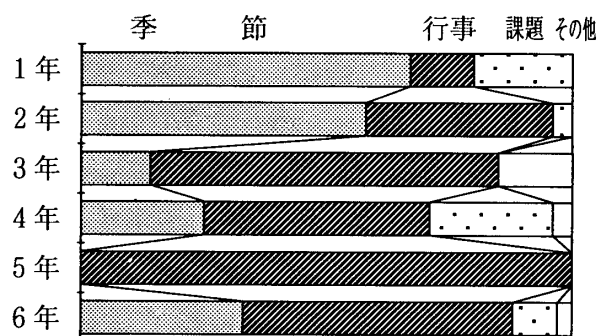


図13 D校の学年別の生活単元の構成と割合

学年には配当されていない。無論、単元と学年の関連性や配当が無い学年に関する理由・根拠については、全く明らかにすることができなかった。

## 3) 学期別の生活単元構成の実態とその特徴

D校の学期別の生活単元の構成要素の配当を検討した結果は、図13のとおりであった。この図から次のことが明らかである。

「季節」単元に関しては、1学期と3学期がほぼ同じで多く、2学期が比較的少ない。学期と単元数との関連は見られない。

「行事」単元に関しては、これも2学期と3学期がほぼ同じで、1学期がやや少なくなっていた。

「課題」単元に関しては、2学期、1学期の順で、3学期には全く配当がなされていない。この単元についても、学期の進行と単元数との関係は、見られなかった。なぜ3学期には課題単元が配当されていないのが疑問である。

## 6 まとめ

生活単元学習に関する学校別の検討をした結果、以下のことが明らかにされた。

### 1) 生活単元の時間配当について

- (1) 時間配当は学校によって異なっているが、特に目立ったのは、低学年に生活単元が全く配当されていない学校がある。
- (2) 時間配当は、学年全体を低・中・高の3区分か低・高の2区分して、時間を割り振りがなされていた。
- (3) その結果、時間配当は児童の発達、学年進行又は経験の積年とは関連性がなく、機械的に割り振っているということが指摘された。

### 2) 単元の構成要素と割合について

- (1) 養護学校の生活単元の構成は、「季節」、「行事」、「課題」の順に多く配当されていた。
- (2) その割合の学校差は、「季節」で37%から59%、「行事」で23%から31%、「課題」で大きな差が見られた8%から26%となっていた。
- (3) とりわけ「行事」では差異が少なかったが、それは全県的な学校行事が統一的に行われて

いるためではないかと指摘された。

### 3) 月別の割合について

- (1) 年間を通しての生活単元構成の割り振りは、全体として三つの「単元」間のバランスが採れていたが、1月から3月はそれが崩れていた。
- (2) しかし11月だけはそのバランスが極端に崩れていたが、その理由は不明であった。

### 4) 学校別の特徴について

- (1) 生活単元の配当は、学年とその配当の間には関連性がない学校が殆どであった。例えばそのピークが中学年であったり、あるいは低学年であったりという具合であった。
- (2) 生活単元の構成要素では、「季節」単元と学年間の関連性は見られなかった。ここでも単元配当と同様に、全体のバランスが考慮されていない点が目立った。
- (3) 「行事」では、6学年が最も多かった。その理由は高学年が中心となって学校行事が行われるので、そのような結果となったと思われるが、その他の学年ではバランスが採れていなかった。
- (4) 「課題」は学年間のバランスは比較的採られてはいたが、学校によっては6学年より1学年が多いのがあり、問題点とされた。
- (5) 学期別の生活単元の配当は、単元数と学期との関連は全く見られなかった。
- (6) 以上の結果から生活単元と学年進行、発達段階、積年の経験の関連または相関は考慮されていないと結論づけられた。当然、これらの要素は教育課程の構築過程で考慮すべき必

須条件であるので、今後の問題点・課題点として強く指摘された。

### 7 おわりに

これらまで、三つの論文を通して県内の養護学校の生活単元の実態とその特徴を検討してきた。これまでそのような研究が十分になされていなかったため、これらの論文は、養護学校の教育課程の在り方や課題・問題点あるいはその開発時の留意点等を明らかにした。今後、県内の養護学校の教員達が、指摘されたことを参考に、よりよい教育課程の開発をされることを望みたい。なおこの論文の分析は、学校の「年間指導計画書」に基づいたものなので、実際に学校で運用している「生活単元学習」とは異なったものとなっている点があると思われるので、その点は今後の課題としたい。

### 参考文献

1. 中村哲雄(2000)、沖縄県立養護学校の生活単元学習の検討(1) — 9校の学校別の生活単元の実態一、琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター紀要、第2号、p31—43.
2. 中村哲雄(2001)、沖縄県立養護学校の生活単元学習の検討(2) — 9校全体及び学年別の生活単元の特徴と課題一、琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター紀要、第3号、p37—50.
3. 文部省(平成4)、生活単元学習指導の手引、慶応通信.
4. 精神薄弱児教育実践講座刊行会(1994)、精神薄弱児講座、生活単元学習、Croireクロワール.